

# 橋のない川2019

## ～自分に負けるな～

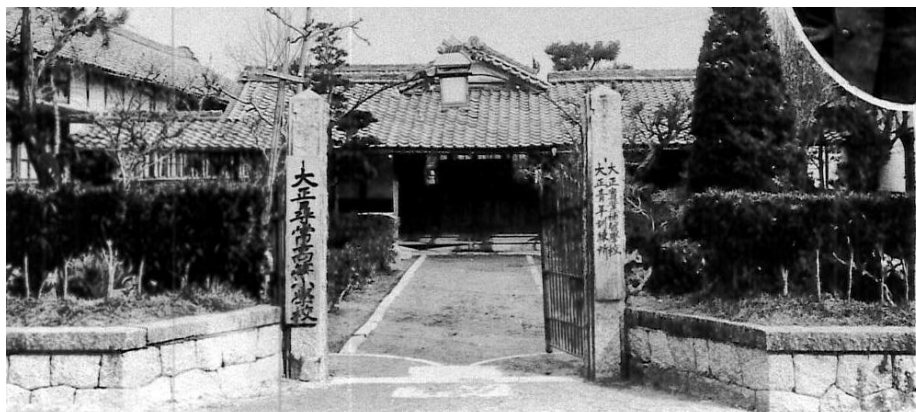
～ナレータの言葉より～

私たち、3年生部落研メンバーは夏休み前に集まり、今年の大中祭ではどの内容で劇をするのか話し合いました。「去年の先輩達は狭山事件、一昨年先輩達は結婚差別を題材にした劇をしはったよな。私らは何をしようか・・・」という問いかけに「小林の水平社の劇をその前の年にやってはるのを見たけど、あの劇をやるのは？こんな場面があって・・・こんな登場人物がおって・・・」と説明が始まりました。そして、「小林水平社か、校区の中の話やし、ええやん、それやろうよ！」と意見が一つにまとまり、今回の劇が決まりました。



さてその劇の内容についてです。社会科の教科書にも載っている全国水平社。その発祥の地が御所市であることはみなさん、知っておられると思いますが、それではこの水平社運動にかかわる有名な小説をご存知でしょうか？

その小説の題名は「橋のない川」。原作者の住井すえさんは奈良県田原本町出身の人です。過去3回映画にもなり、大きな反響を呼んだこともあります。この小説のモチーフになったのが大正小高等小学校差別事件。今からおよそ100年前の1922年、元号で言えば大正11年、当時の大正高等小学校で起こった事件です。この劇では大正11年のこの事件を現在風に再現して上演します。



今回の劇を上演するにあたり、大正校区中学生友の会での学びが子どもたちの力となっていく機会がありました。

その1回目は、夏の1日交流会でした。小林の西口先生、(劇に出てくる西口シオさんの娘さん)から水平社運動、小林のムラのことなどを聞かせていただくことができました。西口先生からは、木村京太郎さんがムラのリーダーとして活躍された話も教えていただきました。また、集会所の奥にある、映画「橋のない川」で実際に使われた屏風を見せてもらったり、原作者の住井すゑさんが小林に来られたときに木村京太郎さんと一緒にとられた写真も見せてもらい、子どもたちは自分の役について想像をふくらませていました。また、水平社博物館の見学や柏原のフィールドワークもしていただき、水平社のリーダーたちについてもたくさん知ることができました。



2回目は、先輩からの聞き取りでした。部落研の先輩である岸元先輩から中学生の時、劇に取り組んだ時のこと、お父さんから「自分に負けるな」と言われた意味を知ったときのエピソードなどを教えてもらい、その後、自分たちの現状について話し合いました。

「自分に負けるな」という言葉の意味を知り、「苦手な勉強と格闘し、進路をつかむことができたんやで」と語る先輩の話聞いて、子どもたちは、自分の生活を一人ひとり振り返りました。「今、自分たちは本当にがんばれているのか？しんどいことから逃げていないのか？……。」そんな意見が出ました。劇のサブタイトルを「自分に負けるな」にしようよ！という意見もでました。ナレーターも台詞を見ずに全部覚えて上演することも決めていました。



思い起こすと、汗だくになり、倒れそうになりながらも取り組んだ体育館稽古…、声を張り上げ、納得がいくまで同じ台詞をくり返す子どもたちの姿がありました。

当日舞台裏では子どもたちが「拍手、うちのが一番大きかったよな！うれしそうにつぶやいていました。」



次回



は子どもたちの感想文を載せます。お楽しみに。

